白山ふるさと文学賞

第十二回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生5・6年の部　優秀賞

「ひいおじいちゃんへの思い」

石川小学校五年　福永（ふくなが）　糸（いと）

ぼくのひいおじいちゃんは今年で九十六才になります。ひいおじいちゃんは、いつも元気で畑仕事をしたりパズルをしていて、ぼくとも遊んでくれます。

初めに、ひいおじいちゃんは何でも食べられますが一つだけ食べられない物があります。それはトマトです。ひいおじいちゃんはいつもトマトをのせてサラダにすると、トマトだけ食べずに残します。そんなにトマトがきらいなのにぼくやお母さん、お父さんのためにトマトを毎年つくってくれます。ひいおじいちゃんはトマトを一つも食べないのに。

毎日ぼくや、弟のためにたくさん持ってきてくれます。そのトマトは少し外側が固くて少しすっぱいけど、ひいおじいちゃんの思いがつまっていてとてもおいしく感じられます。

畑の横に用水があり、そこにはどろの中にひいおじいちゃんが、

「ドジョウがいるよ。」

と教えてくれていっしょにつかまえました。ひいおじいちゃんはスコップでどろを細かく分けて、どろの中にいるドジョウを手でつかまえていました。ぼくがドジョウをつかまえようとするとぬるぬるしてにげていったけど、ひいおじいちゃんはつかまえるのが上手でぬるぬるしているドジョウもすぐつかまえていました。でも、ひいおじいちゃんはやさしくて、一日たつとにがしてあげていました。

低学年のころは、学校から帰ってくるとひいおじいちゃんが待っていてくれて、さつまいもほりをしました。ひいおじいちゃんがシャベルでほってぼくが手でほりました。大きなさつまいもがとれると、

「おおー、でかいの取れたなぁ。」

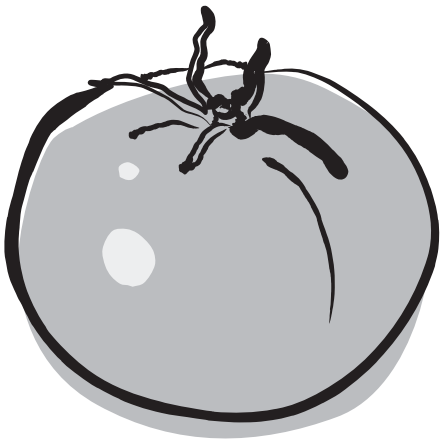
と言って笑ってくれました。

最近は、デイサービスへ一週間に一度行くようになりました。最初は行くのをいやがっていたけど、行ってみると楽しかった様で、いつもデイサービスから帰ってくると笑顔です。デイサービスは、体の調子が悪い人ほど多く行く所なので、週に一度という事は体調も良いのだなと感じました。元気で良かったです。家にいる時は、すもうを見たり、畑仕事をしています。部屋では、パズルをしていて、この前はいっしょにパズルをやりました。部屋には、パズルの作品がいっぱいかざってあってぼくがいっしょにやった時はむずかしくてぜんぜんできなかったけど、ひいおじいちゃんは頭も良いんだなと思いました。

冬には雪遊びをしてくれました。屋根から落ちた雪を固めて長いすべり台を作ってくれました。一番上の高い所へそりを運びにいって、いっきにすべるのがスピードも速くて、小さかったぼくには少しこわかったけど、ひいおじいちゃんが見守ってくれて安心して遊べました。ひいおじいちゃんはいつも笑顔で明るくて小さい時はいつもいっしょに遊んでいました。

ひいおじいちゃんは、十四才で満州へ行きました。満蒙開拓少年義勇軍で中国へ行ったそうです。ぼくは、今十一才なのであと三年後に家族とはなれて遠い国へ行くことは想像もできません。ひいおじいちゃんは十四才で遠い国まで家族ともはなればなれになるのに勇気もあったんだなと思いました。しかもひいおじいちゃんは病気になって高い熱を出して死にそうになったこともあるそうです。その時、友達がかん病してくれて、死なずにすんだそうです。

日本が戦争に負け、ひいおじいちゃんは四年後、日本に帰ってきました。家までの道は長かったけど、帰れるのはうれしかったそうです。かってな想像ですが、にげ帰ったのでまだちゃんと育っていない野菜を取りながら日本へ帰ったのだと思います。その時食べた青いトマトを思い出すのでトマトが食べられなくなってしまったのだとぼくは思いました。

最後にひいおじいちゃんは、やさしくて、頭が良いけど、もう九十六才になるので、元気でいられるのかが心配です。だからいつも

元気か確かめるためにお話したり、いっしょに笑ってすごしていきたいです。九十六年の間には、ぼくが想像できないようなつらいこと悲しいことがあったと思うけど、これまでの思い出や、これからの楽しいことを大切にしたいです。